校長会報

第150号

宇都宮市立西原小学校
栃木県小学校長会事務局

発行責任者
生田　敦

印刷所
(有)正栄社印刷所

主張

黄金の釘ひとつ打つ

栃木県小学校長会副会長
小松原　貴子

今年度、県小学校長会の仕事に携わる機会をいただき、誠にありがとうございました。粛々と続いている会の歴史の重みを感じながら各事業を重ね、自分が何かのお役に立てるようにという思いがふつふつと湧き上がる一年でした。

十月には、生田会長はじめ三十五名の会員で全連小七十五周年記念式典・研究協議会東京大会に参加しました。全国配信、分科会での個人端末を用いたテキストマイニングの導入、Qパスでの簡単受付など、随所に工夫が見られました。とりわけ心に残ったのは、小西美穂氏の記念講演で「悩んでいる人にはマイナスのコミュニケーションが必要」とのお言葉です。心が弱っている人に「元気？」「どう慣れた？」という言葉を掛けるより「ちょっと疲れてない？」「なかなかうまくいかないよね。」などの声掛けの方がコミュニケーションをうまく図れるということでした。声の掛け方を変えるだけで相談がくる、上の立場にいけばいくほど相手が声を掛けづらい存在になっているとのこと。うなずけるお話でした。また大会中に多く耳にしたのは「ウェルビーイング」です。次代を担う子どもたちと、関わる教師の両方のウェルビーイングの大切さが強調されました。

私は今年度特に、校長会の一員として自己有用感に満たされました。この思いの原動力となっているのは、会員の皆様の存在であり、皆様との交流であり、目的意識です。係活動を頑張ってよい気持ちになっている児童と同じだなと苦笑しました。

しかし、これだと思いました。人との関わりの中で児童にたくさん味わってほしい感情は。誰かのために、何かのために、自分を役立たせることこそ、まさに生涯にわたるウェルビーイングにつながるのだと確信しました。

結びに、会員の皆様のご健康と各校のますますのご発展をご祈念申し上げ、挨拶といたします。

（小山市立小山城南小学校）

主張

コロナ禍を経て

栃木県小学校長会副会長
神原　千里

私が小学校校長を務めた五年間は、コロナ禍とともにありました。初年度令和元年二月末に全国一斉学校休業となり、今年五月八日をもって様々な制限が緩和され、現在を迎えています。

一斉休業の中、卒業生が胸を張って新しい世界へ踏み出せるよう、どのように門出を祝ってあげられるかと知恵を絞りました。翌年から三年間は、自校でコロナ流行拡大の兆しがあれば行事を変更や中止することも視野に入れ、最悪を想定した計画、二案、三案の代案を用意しながら行事を計画するのが常となりました。ネットワークを駆使して各種の新しい情報を入手し、自校の条件に照らして判断することも学びました。

縮小せざるを得ない運動会、行き先や交通手段を変更して実施できた修学旅行。それを子どもたちにどう伝えるか。単なる縮小、あれもこれもできなくなったと伝えるだけでは、意欲は削がれるばかり。伝え方にも心を砕きました。

児童や保護者、教職員に現在の状況を丁寧に伝え、できることを一緒に考えてほしい、と誠意をもって伝えてみる、そうすることで、できることを工夫しようという意欲や一体感が生まれることを実感しました。

その中で、何のために行うのか、学校として大切なことは何か、ということを自分自身に問いかけ考え続けることにもなりました。

コロナ禍が収束に向かった今年、力不足ながら県小学校長会の副会長となり、県内外の校長先生方とご一緒する機会を得ました。短い関わりながら、役員の校長先生方は、どの方も魅力的で、自校の子どもたちや後進の先生方のために、いろいろと力を尽くしておられる同志であることを痛感しました。校長という役職の責任の重さを感じつつそこでの経験から得たたくさんの学びに感謝しつつ、過ごす毎日です。

（野木町立友沼小学校）

栃木県小学校長会中央研究大会

令和五年度の中央研究大会は六月三十日（金）、栃木県総合教育センターで開催された。

一　開会

○開会の言葉
小松原　貴子　副会長

○会長あいさつ
生田　敦　会長

○来賓あいさつ
山岸　一裕
県義務教育課長

二　研究発表

◇研究課題
「豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの推進」

◇発表者
鹿沼市立北押原小学校
校長　臼井　孝行　先生

◇発表内容

Ⅰ　趣旨

社会や生活の在り方が大きく変化する時代を生き抜くためには、自らを人との関わりの中で律しながら、自己の生き方を考え、自己を確立していくことが大切である。また、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けるために、一人一人が人としての生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を認識しつつ、感性を豊かに働かせながら、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりしながら、よりよく生きていくことが肝要である。

ここでは、人権教育に視点をあて、多様な他者と協働し、未来を切り拓く力を育成する特別活動とインクルーシブ教育を、意図的・計画的に推進するカリキュラム・マネジメントの具体的な方策と成果を示す。

Ⅱ　研究の概要

１　研究のねらい

本研究では、教育活動全体を通して組織的・計画的に人権教育を推進し、子供たちの実態把握に基づいた効果的な指導方法や評価について工夫・改善を通して、校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

２　研究実践

【A小の取組】

①育成したい資質・能力
「みんなを認め受け入れる力」「進んでみんなと協力し課題を解決できる力」「目標に向かって挑戦できる力」これらの力を育成するために、自治的な能力や態度を育て、よりよい生活や人間関係を築けるよう特別活動において実践する。

②校長としての取組
○学校経営計画への位置付け
・学校課題の推進（特別活動）「よりよい学級・学校生活をつくろうとする特別活動の実践」
○組織的に機能する校内体制づくり
・「自分事」「みんなで意識」とするための組織と研究の流れの体制に
○教職員の理解促進と資質向上
・年度初めの特別活動（学級会）の進め方や方向性を共通理解

【B小の取組】

①育成したい資質・能力
「自らつながり、受け入れ、未来を拓く力（主体性・寛容な心・対話力）」これらの力を育成するために、児童の学びを尊重した授業実践（インクルーシブ教育の実現に向けた授業作り）を軸とした。

②校長としての取組
○学校経営計画への位置付け
・豊かな人間関係作り（ピア・サポート活動の推進）
・一人一人に寄り添った自立支援（インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進）
・学校課題の推進「だれもが分かる・できる喜びが味わえる授業づくりの工夫～インクルーシブ教育の視点に立った、児童の学びを尊重した授業づくり～」
○組織的に機能する体制づくり
・個への組織的なサポート体制の確立

Ⅲ　研究の成果と課題

１　成果

【校長として】

①学校経営方針や教職員の役割を明確にすることで、教職員同士の連携が強化され、組織が活性化した。

②各チームのチーフを中心に学校課題を推進することで、ミドルリーダーとしての資質が向上した。

③外部機関や教育委員会、他小中学校と共に研究を進めることで、教職員の資質の向上が図れた。

【教職員の変容】

①教職員の役割意識が高まり、情報交換をするなど、自主的に磨き合う場が日常化し、研究集団として同僚性が高まった。

②児童の思い（ニーズ）や実態を把握し、個に応じた指導を実践することで、児童一人一人の意見を大切にする意識が高まった。

２　課題

教職員の資質の向上が図られ、同僚性が高まったが、他教科領域等への広がりについては、不十分な面もある。教科横断的な視点を踏まえ、保護者や地域、外部機関等との連携のもと、更なる充実を図っていく。

三　情報提供

◇題目
「架け橋期の教育の充実」

◇説明者
栃木県総合教育センター
幼児教育部長
髙木　恵美　先生

◇内容

□国の動向から
義務教育開始前後の五歳児から小学校一年生の二年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期で、「架け橋期」と呼ぶ。

□架け橋期の子供たち
特に入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。い

わゆるスタートカリキュラムの編成・実施になる。

□管理職の先生方へ

職員二名を連れて保育を見に行きましょう。入学式では「校長先生は知っています。皆さんは年長さんで『何でもできたこと』や、『何でもやろうとしていたこと』を」を入学式の決まり文句にしましょう。

四　講演会

○講師紹介

神原　千里　副会長

◇演題

「教師の悩みとメンタルヘルス『リレーションでこころ元気アップ講座』」

◇講師

明治大学文学部教授

諸富　祥彦　先　生

◇講演内容

□リレーションの実習

リレーションは、心と心のふれあい、気持ちと気持ちのつながり、つまり相手に関心をもつことです。学校の中では、校長に関心をもたれているか、先生方の中には気にしている人もいます。五十代の人はベテランだから、自分のことは自分でと校長は思いがちです。しかし、特に五十代のほうが校長からどう思われているか気にしている人が多いかもしれません。若手の方に関心をもちがちですが、五十代の人にも声を掛けましょう。

□管理職は人間関係のプロでなくてはならない

管理職には、リレーションの達人・プロになってほしいです。学校の雰囲気は、人間関係の善し悪しです。人間関係のよい職員室にしてほしいと思います。雰囲気をつくるキーパーソンは教頭。教頭の雰囲気をつくることができるのは校長。

話の終わりは、励ましの言葉にポーズを付けて伝えること。アドラー心理学の勇気づけです。「あなたならできると思うんだ」と。

「スマイル・フットワーク・声掛け」の三つが人間関係の大切な要素です。人間には得手不得手、相性の良い、悪いがありますが、校長には、相手を選ばずにリレーションをつくれる人間関係のプロになってほしい。

□「援助希求力」の重要性「支え合える職員室」を

迷っている子（大人も含めて）に「あなたのことを気にしていますよ」という発信をすることです。子供のＳＯＳを見極められる学校であってほしい。「援助希求」をし合えるような職場にしてほしい。みんなで弱音を吐いて、助けを求められる環境をつくってほしいです。そのためには、校長には相談してもらえる校長であってほしい。そばにいるとほっとできる校長であってほしい。ほっとできる雰囲気、これは本当に大切です。大敵は忙しさです。校長の機嫌を伺っている周囲がいます。忙しさに圧倒されてカリカリしている校長と、多少忙しくても忙しく見えない校長がいます。これは本当に優秀な校長だと思います。本当に優秀な校長は、てきぱき仕事をこなしながらも忙しそうに見えない人。並の人は、忙しいとき「忙しい」と。下は、大して忙しくないときも「忙しい」とバタバタしている人。忙しくても表に出さない、計画的に仕事をしながら余裕がもてる校長になってください。

一日に教員がイラッとする回数は三回と言われています。イラッとしたまま人に接しないこと。先生方は、校長からどう思われているかとても気にしています。イラッとしたときは余計な一言を言いがちです。イラッとしたら離れる。そして、穏やかになったら先生方に接しましょう。一番大切なことは校長先生が穏やかさをキープすること。穏やかな校長がよい職場をつくります。

◇講演概要については、令和六年三月発行の『小学校長研修記録六十三』に掲載

○謝辞

堀場　幸伸　副会長

○閉会の言葉

碓井　勉　副会長

栃の葉

栃木県教育委員会

ふるさと〝とちぎ〟を学ぶ機会の充実を目指して

今年、栃木県は、誕生百五十年の節目を迎えました。本県ではこれまで、六月十五日の県民の日に多くの学校で、県民の歌を歌ったり、栃木県の特産品を使った給食を食べたりするなど、様々な取組が行われてきました。

県教育委員会では、栃木県教育振興基本計画二〇二五の基本施策に「ふるさとの自然・歴史・伝統・文化等を学ぶ機会の充実」を位置付け、子供たちがふるさと〝とちぎ〟を学ぶことで、とちぎの魅力を再発見することができるよう、ふるさと学習の推進を図って参りました。

主な取組として、ＧＩＧＡスクール構想の実現に伴い、配備された一人一台端末をより有効に活用し、各学校におけるふるさと学習の充実に資するよう、過去に発刊した資料集「みんなで学ぼう！栃木県」と、「もっと学ぼう！栃木県」をデジタルブック化いたしました。中でも、「もっと学ぼう！栃木県」のとちぎデジタルミュージアム〝ＳＹＵＧＹＯＫＵ〟リンク版では、貴重な資料の一部を高画質で、細部まで閲覧できるようにしております。

今後は、現在公開している「とちぎふるさと学習」のホームページについても内容更新を行い、デジタルコンテンツの一層の充実を図って参ります。

ふるさと学習を通して、児童生徒が、ふるさと〝とちぎ〟の魅力を再発見し、愛情や誇りをもつことができるよう、各学校におかれましては、取組の充実に向け、引き続き御協力をお願いいたします。

地区だより

〔宇都宮地区〕

本地区では、活動目標を「自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す　学校経営の推進」とし、学校経営、働き方改革、ＧＩＧＡスクール構想対策など十のテーマに沿って研究を進めた。

七月の研修会では、全連小及び関ブロ大会についての報告と班別研修を行い、各学校における様々な取組について紹介し合うとともに成果や課題を共有した。

また、十一月の上三川地区校長会との合同研修会では、宇都宮動物園園長の荒井賢治様より、経営マネジメント、人材育成の視点から講話をいただいた。

二月には、班別研修の集大成として各班の研究発表を予定している。

〔上三川地区〕

本地区では今年度の研究テーマを「インクルーシブ教育」「児童生徒指導」の二つに設定し、研究を進めてきた。

八月には「インクルーシブ教育」について、各校での様々な実践例を持ち寄り、取組を学び合うことができた。今後も「支持的風土」の醸成を視点として推進していきたいと考えている。

九月には本地区小中学校合同の研修会に、栃木県教育委員会事務局河内教育事務所学校支援課副主幹野口幹様を講師としてお招きし「生徒指導提要改定のポイント」と題して御講話いただいた。特に重要である「チーム学校の実現」「教職員同士の心理的安全性」を構築するため、今後も「チーム上三川」で研鑽を深めていきたい。

〔上都賀地区〕

本地区では、研究主題を県の基本目標と同一とし、鹿沼市日光市のテーマをそれぞれ「ともに学び続け心豊かに生きる子どもの育成を目指す学校経営の推進」「校長の資質向上、教職員の学校経営参画」として二市で連携しながら研究に取り組んだ。六月の全体研修会では、「学力向上と学校経営」「人材育成と学校経営」「健全育成と学校経営」の三分科会に分かれ研究協議を行い、課題の解明に向けた意見交換を行った。一月の全体研修会では、講話、研究協議、各市の年間研修成果の発表を行い、地区全体で学びを共有し、個々の資質能力の向上に結びつけた。

〔芳賀地区〕

本地区では、研究主題を「自ら未来を創造し、ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営の推進」と定め、研究を推進してきた。

全体研修会を年三回実施した。六月の第一回研修会では、研究についての方向性を確認し、九月の第二回研修会では、各校の研究実践を持ち寄り、研究主題に迫るためのグループ討議を行った。各校の様々な取組が紹介され、大変有意義な時間となった。

二月の第三回研修会では、「学校現場における人材育成について」や「学校組織マネジメント」等について、前教育次長の中村千浩先生に御講話をいただいた。

〔下都賀地区〕

本地区は、「未来を見つめながら学びに向かい、学ぶ喜びを分かち合える子供の育成」を研究主題とし、各校で実践を行ってきた。十一月の全体研修会では、①学ぶ力を育む取組　②学業指導の充実に向けた取組を研究の視点とした実践の発表と研究協議を行った。研究協議では活発な意見交換がなされ、各校において児童の学力向上につながる授業改善や教育課程の工夫、若手教員の授業力向上のための工夫など幅広い角度で情報を共有し、今後の学校経営のヒントを得ることができた。

〔下野地区〕

本地区では、「自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営の推進」の研究主題の下、「アフター・コロナに向けて進める、地域連携・協働の取組について」を副題として研究を進めてきた。

六月には、市校長会の研修会として県総合教育センター生涯学習部長井上昌幸先生の御講話を拝聴し、「地域連携教員が活躍する連携の在り方」について研修を深めることができた。

一年間の研修を通して今後の持続可能な地域連携・協働の方向性、校長の関わ

り方について学ぶことができた。

●●●●〔小山地区〕●●●●

本地区では、二班に分かれ、A班は「次代を担う管理職育成の在り方Ⅱ～管理職のバトンをつなぐ持続可能な学校経営に向けて～」、B班は「理想の校長を目指して」という研究主題で研修を進め、一月の班別研究発表会でその成果や課題を確認することができた。

また、七月には学校経営実践発表を実施。九月に、文部科学省CSマイスターとしても活躍されている、栃木市地域政策課社会教育指導員、鈴木廣志先生をお招きして「コミュニティ・スクールの可能性～学校支援から学校参画へ～」の講話をいただいた。四つの専門部による研修等の事業も行った。

●●●●〔栃木地区〕●●●●

本地区では、今年度の研修テーマを「『活力に満ちた楽しい学校』を実現するための学校経営の展開」と設定し、研究を進めてきた。

六月から十月までの研修の中で、四班に分かれてテーマに関する各学校の取組について実践発表、研究協議を行った。

研究協議の視点は、①確かな学力の育成　②豊かな心の育成　③健やかな身体の育成　④魅力ある教育活動の充実、等の四点である。

コロナ禍における経験や学びをポストコロナでの学校経営にどのように生かしていくかを考える上で、各学校の特色ある教育活動推進に向けた学校経営の在り方を共有することができ、大変有意義であった。

●●〔塩谷南那須地区〕●●

本地区では研究主題を「自ら未来を拓き、ともに生きる社会を創る子どもを育む学校経営」とし、この地区の研究主題を基に、六つの各市町校長会が独自性を生かした研修テーマを設定して、多くの視点から研修を進めている。十一月の研修部会では各市町の研修の成果や課題を確認した。

九月の全体研修は、ブラインドマラソンランナーの加治佐博昭氏、伴走者の豊島聡氏を講師に迎え「『ともに生きる』とは。見えないからこそ見えること、感じること」の演題で講演をいただき、有意義な学びの時間となった。

●●●●〔那須地区〕●●●●

本地区では、「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の全体主題を踏まえ、大田原市、那須町、那須塩原市が、各々の実態に応じた研究主題を設定し、各学校の現状や問題点、取組などをもとに、令和四年度から令和六年度の三年間を通して研究を深めていくこととしている。本年度の研究は、今年で二年目となる。十二月に、それぞれの市町が、研究の中間発表を実施するとともに、令和六年度の「第七十六回関ブロ長野大会」の研究主題等に対応しつつ、今後も、継続研究をしていく予定である。

●●●●〔佐野地区〕●●●●

本地区では、全小連徳島大会での提案を控えていることもあり、大会主題及び副主題を受けて、所属分科会のテーマに沿うべく、地区として「教育現場のリーダーを育てる人財育成」を共通の研究主題として設定した。そして、これまでの研究の進め方と同様に四つの研修班に分かれて、実践内容についての発表及び協議を行った。その後、各班で実践された取組について成果や課題を確認し共有を図った。

さらに、十一月には講師に日本クリエート代表取締役である坂東史重氏をお招きし「リーダーを育てる人財育成」と題して小学校長研究大会を実施した。

●●●●〔足利地区〕●●●●

本地区では、県小学校長会活動目標である「自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す　学校経営の推進」を受けて、研修を進めてきた。

本地区二十二の小学校を三つの班に分け、「教職員の人材育成」や「教職員の指導力向上」をテーマに、各校での実践や意見交換を中心に研修を行った。

また、足利市こども家庭政策課のヤングケアラーコーディネーターの方より、「栃木県のヤングケアラーの実態と足利市の支援について」と題した講話をいただいた。

どちらも大変有意義な研修であった。

自ら未来を創造し　ともに生きる社会を創る子どもの育成を目指す学校経営

つながりを育て、絆を深める教育を目指して

真岡市立大内西小学校　神保　元康

本校は、真岡市の北西部に位置し、南北にのびる鬼怒川東側の河岸段丘上にあり、創立以来「青於」の精神のもとに教育活動を実践してきました。保護者や地域は、学校教育に関心が高く理解もあり、教育活動へ進んで援助や協力をしてくれます。

児童数八十一名の小規模校です。そのため、児童同士が名前を知っており、昼休みなど様々な学年が一緒に遊ぶ姿も見ることができます。そのことを本校の良さと捉え、つながりを育てるために、様々な活動を行っています。その一つに、縦割り共遊活動があります。全校児童を六班に分け、児童の計画で共遊を行うことで、児童同士のつながりを育てています。

そして、絆を深めることにも取り組んでいます。真岡市では、自然教育センターでの宿泊学習が、三年生から計画されています。その際に、活動だけでなく、寝食も縦割り班で行うことで、六年生が責任をもって取り組むことができるようにしました。運動会の時には、高学年で応援団を結成し、応援の仕方を話し合い、低・中学年に教えに行き、全校児童一丸となっての応援合戦は、圧巻でした。また、百五十周年記念遠足では、学区内にある井頭公園まで、縦割り班ごとに歩いて行きました。その際にも、高学年が低学年に優しい言葉を掛ける場面を多く見ることができました。

今年度の創立百五十周年記念事業を行うにあたり、実行委員会には、教職員や保護者の他に、地域の区長や町会長、関係団体長にも所属していただいています。地域全体で、本校の百五十周年を祝ってくれています。本校の校章は、今から五十年前の百周年の際に制定されました。その校章は、児童の知・徳・体を育てるために、学校・家庭・地域がつながって取り組んでいくことが、デザイン化されています。その姿が、五十年経った今でも続いています。この地域や社会で生きていく児童を育てるために、学校でつながりを育て、絆を深める教育が大切であると考えて、取り組んでいるところです。

運動会　応援団

百五十周年記念遠足

小規模校のよさをいかして

佐野市立多田小学校　板川　武史

本校の創立は明治六年一月十五日で、今年度百五十周年を迎えました。児童数は多い時で三百名余りおりましたが、現在は三十九名で、複式学級が二学級あります。佐野市内で一番小さな小学校となりました。小回りがきく小規模校のよさをいかして、学校経営に取り組んでいます。

本校では、目指す児童像を「夢をもち、自分の可能性を信じてがんばり続けられる子」とし、「Chase My Dream!」を合い言葉に、様々な活動に取り組んでいます。北京オリンピックが開催された令和三年度からは、「一輪車」「竹馬」「ボール投げ」「登り棒」「鉄棒」の五種目の検定を五輪になぞらえ、「タダリンピック」を始めました。投げる力が弱かった児童の実態から、ボール投げの検定を考案しましたが、投げる力の向上には、体力をバランスよく向上させる必要があると考え、めあてをもたせ楽しみながら実施しています。

また、児童が「学校は楽しい」「やってみたい」「できた」「わかった」と思えるように、様々な見学や体験的な学習を実施したり、専門性をもった外部講師や地域の方を招聘して授業をしていただいたりしています。主なものでは、大学の先生に道徳の授業を、プロスプリントコーチに体育の授業をしていただくことができました。

さらに、今年は月に一回ジャンボ昼休みをつくりました。掃除の時間をなくし、昼休みを四十五分にしました。児童たちには、遊びを通して思い切りストレスを発散したり、好きな読書をゆっくりしたりしてほしいと実践しています。

こうした様々な活動は、学校だよりや学校ホームページ、フリー参観の実施などで、保護者や地域の方に広報し、開かれた学校をめざしています。

小規模校には小規模校のメリットやデメリットがありますが、今後もメリットをできるだけカバーできるような学校経営を考え、職員と一丸となって、取り組んでいきたいと思います。

タダリンピックのボール投げ

特色ある学校づくり

体験活動を柱にした教育の推進

小山市立下生井小学校　櫻井　伸江

本校は、小山市南部に位置し、ラムサール条約登録湿地の渡良瀬遊水地から約六百メートルのところにあります。この地域は、小山市で環境保全に力を入れていることもあり、湿地内にコウノトリが生息するようになり、学校にもよく飛来してきます。そうした豊かな地域の資源や人材を学習や体験活動に生かし、児童の生きる力の育成につなげています。

三年生以上では、総合的な学習の時間において、地域の環境や渡良瀬遊水地について学習する内容を取り入れています。自分で設定した課題を解決するため、何度も現地に足を運びながら学習を進められることが、本校の最大のメリットです。最後の総まとめとして、学習発表会で全校生や保護者の前でその成果を発表します。

最近では、コウノトリが懸け橋となり、オンラインで兵庫県や徳島県の小学校と学びの共有ができるようになったことも大きな成果で、子どもたちの自信にもなっています。

また、本校は、月に一度、全校で活動する「あんずっ子きらきらタイム」という時間があります。その時間を活用して、講師の先生をお招きしながら、渡良瀬遊水地での植物観察会、水辺の生き物観察会、野鳥観察会を行っています。こうした、実際に観察をする機会が豊富なため、一年生から自然への興味や関心が高く、生活科の学習においても学校周辺の自然について、学ぶ単元を設定しています。

「地域を知り、地域から学ぶ」学習を積み重ねることで、知識を身に付けるとともに、思考・表現力等も養われますが、それ以上に、おのずと思いやりの心やふるさとを愛する気持ちが育まれることは、学力の向上以上に大きな成果です。

本校は、希望があれば市内全域から通学が可能な小規模特認校です。これからも、本校でしかできない教育を展開しながら、聡く優しく健やかな児童の育成に取り組んで参りたいと思います。

水辺の生き物観察会

野鳥観察会

子どもが作る、桜の歴史

足利市立桜小学校　早川　理恵

足利警察署の隣に位置し、赤い瓦の屋根の桜小には、現在二百五名の児童が在籍し、元気に登校している。校庭の一角にある「よい子の森」には桜、欅、楓、椎の木が生い茂り、木が落としてくれる葉や木の実は、生活科の学習で大活躍している。また、学校の南側には桜並木が続き、学区の近くには渡良瀬川が流れているという恵まれた自然環境の中で、のびのびと教育活動が行われている。

学校課題「一人一人を生かし育てる教育」は、前身の千歳小から四十年以上引き継がれてきたものであり、目の前にいる「この子」を大切にし、その確かな成長を実現させていきたいという強い思いが込められている。**全ての教育の基盤は人権教育である**という信念のもと、学校教育目標の具現に向けて、恵まれた環境と地域の教育力と素直で優しい児童の特性を生かし、次の三点を実践している。

○知…パワーアップタイム

「放課後に学べる場を提供することで、児童の主体的な学びを保障する。個別指導をし、授業に自信をもたせる。」とのねらいのもと月火木金の放課後、三～六年生を対象に実施している。教職員の他地域のボランティア（元校長先生三名、大学生二名）が見てくださり、内容は宿題や自主学習等自分で決め、取り組んでいる。学習内容をその日のうちに復習できる、わからない問題がわかるようになる、という優れた効果があり、桜小の自慢できる取組の一つである。

○徳…桜おうえんプロジェクト

害虫に蝕まれ、伐採されていく桜の木を見た子どもたちが、「校名の由来になった桜を守りたい。桜のある桜小にしたい。」との思いから立ち上げたプロジェクトである。友達を思いやる言葉や行動、団結力、愛校心、動植物を慈しむ心へと広がりを見せている。

○体…スポチャレタイム

業間休み終了五分前に、全校児童で一斉に行っている。（四月～十二月は持久走　一月～三月は縄跳び）自分のめあてに向かって毎日続ける習慣により、基礎体力はもちろん、根気強さや集中力も、確実に身に付けている。

地域の宝である子どもたちが、自分に、学校に、地域に誇りをもちながら、知・徳・体に優れた姿で桜小の歴史を作っていってほしいと願っている。

パワーアップタイム

スポチャレタイム

話題の広場

小規模特認校として

下野市立細谷小学校
坂本　美保

本校は、今年創立百五十一年目の歴史ある学校である。そして過小規模の解消を目指す学校、小規模特認校でもある。全校児童五十二名、そのうち特認校制度を利用する児童は二十一名、四割である。

地域のご支援をいただいて実施する本校ならではの行事・学習は、いちご狩り、梨狩り、サツマイモ栽培、校区内の工場や花卉栽培農家の見学等、様々である。なかでも三年生は「総合的な学習の時間」で「かんぴょうのひみつをさがそう」をテーマに、かんぴょう農家さんからいただいた苗を植え、暑さと同時にぐんぐん育った実を収穫して運び、かんぴょう剥きを体験させていただく。残りの実は乾燥するとふくべ細工の材料となる。「下野かんぴょうふくべ振興の会」の手ほどきにより思い思いのふくべ細工づくりをするのだ。なんと豊かな体験なのだろうと思う。そんな恵まれた環境で育つ子どもたちは、素直で優しい。思いやりがある。

来年、二十五年ぶりに複式学級解消となる。慈しみ、育み続けてきてくださった地域、先達の皆様の思いを受け継いでいきたい。

かんぴょう剥き体験

ふくべ細工づくり

地域のシンボルとして

矢板市立片岡小学校
大野　和久

明治六年に発足した本校は、昨年度に創立百五十周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。百五十周年記念行事に合わせて誕生した学校キャラクター「かたりん」は、見る人だれもが思わず微笑む姿であり、本校の様子を象徴しているといえる。

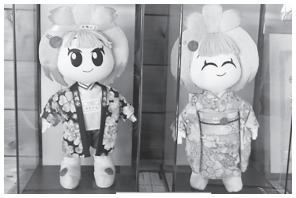
また、本校は立地的にも恵まれている。学校近くに高速道路のインターチェンジがあり、校門を出て三分も歩けば片岡駅に着く。

本校で学んだ多くの子どもたちは、片岡駅を眼下にする学び舎から、いずれはあの列車に乗って社会で活躍するといった夢と希望を抱きながら学びに精進してきたのではないかと想察される。

だからであろうか。保護者はもちろんのこと、地域の方々の学校に対する協力的かつ献身的な姿には本当に頭が下がる。地域の有志が「見守り隊」として子どもたちの安全な登校を守り、スクールパートナーズとして校外学習や実習などのお手伝いをする保護者も多くいる。

さらには、図書室に文庫を寄贈し続けている方や、「子どもたちのために」と所有するサツマイモ畑を快く提供してくれる方もおり、校長として、「地域全体で支えられている学校」であると強く感じる。

まさに地域のシンボル。地域に支えられ、自らも地域を照らし続ける灯りとして、教職員と地域が一丸となって片岡小学校を高めていけたら…と願っている。



事務局だより

事務局長　小野　浩司

今年度も、県内各地区からの要望や提案を総務部でまとめた提案事項について、八月三日に県教委との教育懇談会を実施しました。その詳細については、十月の第三回理事研修会で報告し、また県小学校長会ホームページに掲載しましたので、ぜひご覧ください。

昨年度は、本県の「創立七十五周年記念式典・研究大会・記念講演会」が開催されましたが、今年度は十月に全連小の「七十五周年記念式典」が東京国際フォーラムで行われました。全国から約三千人の方が参加され、本県からも歴代の会長・事務局長様に、それぞれ感謝状が贈呈されました。今後は、全連小の記念誌が、会員の皆様のお手元に届く予定です。

新型コロナウイルス感染症が落ち着きを見せてきていますが、インフルエンザが流行の兆しを見せています。まだ、学校運営は落ち着かない状況ですが、こんな時こそ県小学校長会のネットワークを活用して会員の皆様で情報を共有し、乗り越えていければと考えています。

編集後記

令和五年五月に新型コロナウイルス感染症が五類に移行となり、教育活動への制限も徐々に緩和されてきました。マスクを外した子供たちの可愛らしい笑顔がたくさん見られるようになってきたことに大きな喜びを感じます。また、どの学校におかれましても、新たな教育活動を工夫しながら日々の学校経営に御尽力されていることと推察いたします。

様々な教育活動が復活の方向にありますが、コロナ禍を経験した今、私たちに求められているのはコロナ禍以前の教育活動の復活ではなく、創造性に富む新たな学びの実践です。

コロナ禍で培った対応力を生かし、会員の皆様との連携・協働を大切にしながら、さらに柔軟に、果敢に、未来を切り拓く人材育成につながる学校経営に努めていきましょう。

本号発行に際し、玉稿をお寄せいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

那須町立田代友愛小学校
渡邊　法子